

さえ現われた。その反対に大きなスペースで台風の解説記事をのせたのである。なる程新聞を手にとってみるとこの方がより实际的であり、ひいては個人の防災活動にも役立つのである。一例をあげれば紙面ににぎわす台風の進路図である。台風の進路予報に関しては残念ながら今なお完全的中するとはいえない実情にあり、進路に大きな幅があるわけであるが、それを図解で今後の進路を扇形で表現することは誰がみても直観的でわかり易いものである。さらに台風はその進路にしたがって雨量とか、風の分布がちがうものであるから解説記事で風が今後どのように吹きはじめるか、またその風がどのように変化すれば雨に注意した方がよいか、雨よりもむしろ風に注意をした方がよいか、個人の防災上の参考事項をあげ、場合によっては考えられる二つとか三つの進路を示し今のところどこへ進む可能性が強いとか解説的な気象知識の普及に力をそそいでいるのである。

元来台風の進路予想を含めた一般の予報は、利用する対象がはっきりしているわけではなく、いわば最大公約数的な予報であるから、すべての個人に合う予報とはならないのである。その点新聞のゆきかたは正しいものと思われるし、気象台解説担当者もそうすることによって、報道人からしぼられるくるしみから救われるのである。

気象台で発表する予報をう呑みにするような日常の指導方針は極力さけ、最少限の気象判断能力を持たせる方向に進みたいものである。明治以来あまり変らぬ天気予報も割切って出すところに問題があるのであって、この辺で台風と同様解説のようなものを加えて予報の足りざるところを補ってみてはどうであろうか。

ラジオ報道について

放送記者からよく聞かれることは“新聞に出ている内容と同じものをラジオで放送しても差支えないではないか”ということである。なる程そういわれれば、われわれとしては文句のつけようがなく、まして報道の自由を云々されればそれまでであるが、目でみる新聞と耳で聞くラジオとは、同じようであっても本質的には同じではないと思われる。新聞で成功したからとてラジオでも成功するとはいい難い。

情報理論の気象学への導入

戦後目覚しく発展しつつあった情報理論も骨組はほぼ完成したようである。今後はその仕上げと応用分野の開拓に向うことであろう。通信工学はいうまでもないが、物理学、生理学、心理学等々すべての分野に浸透しつつあるこの理論は気象学へも当然応用されるにちがいない。筆者は以前にその可能性を述べたし、また天気のエントロピーを計算した。先般の気象学会で小河原正巳氏

昨年、その弱体性を曝露した新聞が、今年、にがい経験を生かして、解説重点の新生面を切り開いた。その新しい道をラジオが自身の速報性をすてて、新聞のあとを追う傾向の出たことは注意すべき点と思われる。

ラジオの持つ武器はその速報性である。ラジオは時々刻々動いてくる台風を正確に速報するのが本筋であり、新聞のまねをして幅のある予想進路図の12時間とか24時間先の予想位置を地名とか緯度経度で放送することなどは、専門家とか船舶関係者には理解できるかも知れないが、大多数の人々には理解できないと思われる。またラジオは新聞とちがって聞きちがいか読みちがいかという大きな問題がある。例えばラジオで“あすの朝東京と名古屋の間に台風が来る”と放送されたとして、それが何かのはずみに“東京”を聞きもらして“名古屋”だけが耳に入ったとすればその結果はどうであろうか。テレビに関しては、新聞とかなり似かよった点もあると思われるが、まだ本格的な経験もないので何とも言いえない実情にある。

今年のラジオの傾向は民間放送とのはげしい競争のゆえか気象台で発表する情報をそのまま放送したことが少なく、新聞と同様、情報をくずして取材形式をとり、そのかわり“発表”という言葉を使わず“気象台の観測によれば”というような傾向が強くなって画一的な情報を極端にきらいはじめたことは注意すべき事柄であろう。

元来情報はラジオ用に書かれているといっても差支えない程であるが、それが今年のようにラジオも使わなくなったことは、それがどこに原因があるかととて研究してみる必要があろう。情報が単に通知電報用のある特定の場所にしか知らされないような実情ならば、あらためて情報というものを考えなおさなければならない。業務規程にある情報が現在の社会情勢に合わないものなら、合うように改定するなり、内容を変えるなりして、世間からとりのこされないことをのぞむものである。

気象事業は報道界の積極的な協力があってこそはじめてなすとげられるものであって、それがひいては世の要望に沿い得る防災を主とした気象サービスでもあるからである。

尙昭和30年の台風概要は11月15日現在別表の通りである。
(中央気象台天気相談所)

は予報の情報量について論じた。最近到着した雑誌によると1955年アメリカではペンシルバニア大学の Holloway and Woodbury が天気予報とその検定に応用し、同年ケンブリッジ大学の E. W. Wahl も天気予報にエントロピーの概念を使うことについて論じている。

それらのくわしいことは別に紹介するとして、合理的な気象技術の発展にはこの方面の研究の開拓が必要であると思うが、さて、どうであろうか。(渡辺次雄)